小美玉市の歴史を知ろう⑮
「王」の眠る場所
～玉里舟塚古墳～

古墳とは、三世紀後半から七世紀前半の約350年間に、権力者を葬った墳墓のことで、小美玉市内にも、193基の古墳があります。

六世紀になると、霞ヶ浦北岸の玉里地区には、60～90mの前方後円墳が数多く築造されます。その数は、帆立貝形古墳を含めると10基にもなります。霞ヶ浦沿岸の中で比較しても、玉里地区における大型前方後円墳の密集度には、眼を見張るものがあります。その中でも、玉里総合支所の南側、約200mに立地している玉里舟塚古墳は、特殊な二重の石棺と多種多様な埴輪が出土しており、霞ヶ浦沿岸の政治的な動向を解明する上で重要な古墳です。

特別展「王の埴輪」－玉里舟塚古墳の埴輪群－のひとこま　原資料：茨城県立歴史館

舟塚古墳は、昭和40～43年にかけて、埋葬施設と埴輪列を解明する目的で、茨城県教育委員会と明治大学考古学研究室によって発掘調査が実施されています。調査に先行して実施した測量調査等の結果、墳丘長72m、後円部径37m、前方部前端幅54mを測る前方後円墳であることが明らかになりました。また、墳丘の西側には造り出し部が付けられています。

埋葬施設の調査では、後円部に二重の箱式石棺が確認されました。この石棺は通称「雲母片岩」によって構築され、その周辺にも、同じ石材の板石が敷き詰められていました。複数回にわたる盗掘により、副葬品は散逸してしまいましたが、調査では銀製圭頭大刀柄頭、鹿角装刀子、挂甲小札、鉄鏃、ガラス製小玉、丸玉などが出土しました。石棺内には、人骨が残存しており、鑑定によると20歳以下の男性とされています。

埴輪列の調査では、墳丘を全周する埴輪列が確認されました。その中でも、前方部西側と後円部東南側では、円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪で構成される埴輪列が二重に巡っていることが確認されています。古墳に立てられた円筒埴輪は六条七段で、その高さは約80cmにもなり、朝顔形円筒埴輪に至っては、九条十段で110cm程度の大型品です。

墳丘西側の造り出し部や周溝から、大量の形象埴輪が出土しています。その種類は人物埴輪（武人・力士・女性）、盾持人、家形埴輪、馬形埴輪などがあります。これらの形象埴輪は、造り出し部に集中して配置されていたものと思われます。武人埴輪は上半身と下半身を別々に成形、焼成して、墳丘上で組み合わせるタイプの人物埴輪です。このような「分離成形」の人物埴輪は、茨城県中央部から県東地域の古墳で確認されています。

この他にも、双龍環頭大刀などの武器、四獣鏡、馬具、鉄鏃などの伝舟塚古墳とされている資料もありますが、すべてが舟塚古墳から出土したとの確証は得られていません。

舟塚古墳は、埴輪や副葬品から六世紀前半に築造されたとされています。二重の箱式石棺や六条七段の円筒埴輪は、茨城県内の古墳でも類例が少なく、舟塚古墳の特殊性を示しています。舟塚古墳以降、玉里地区の霞ヶ浦沿岸の台地上には、大型前方後円墳が築造されます。これほどの限られた地域に数多くの大型前方後円墳が築造されることは、茨城県内であまりありません。この現象は、霞ヶ浦沿岸の中で、北岸の政治的優位性を物語っているのかもしれません。舟塚古墳の被葬者は、霞ヶ浦北岸の水上交通を掌握した首長墓と想定することができます。

◆　◆　◆

現在、明治大学博物館（東京都千代田区）は、2010年度　明治大学博物館特別展「王の埴輪」－玉里舟塚古墳の埴輪群－を開催中です。

近年、明治大学博物館において、発掘調査で出土した埴輪の再整理が行われ、横座り方式の乗馬を示す馬形埴輪、柱付の家形埴輪、まわしをしめた力士埴輪などが明らかになりました。今回の展示では、明治大学博物館と茨城県立歴史館、小美玉市玉里史料館などに分散して収蔵されている埴輪など350点を一堂に集めて、霞ヶ浦北岸に君臨した「王」の実像に迫る内容になっています。

◆会　期　12月12日（日）まで
会期中無休
10時～17時

◆入場料　300円

◆会　場　明治大学博物館
（駿河台キャンパスアカデミーコモン地下1階）

◆アクセス　JR御茶ノ水（中央線）下車　徒歩5分

◆問い合せ
☎03－3296－4448